

住人と市民

特集

2

外林大作

<はじめに>

現代の代表的な精神分析学者の人にエリクソンという人がいますが、この人はアメリカに住むユダヤ人です。この人の著書もいくつか翻訳されていますが、なかなか難解だという評判のあるものです。彼の使った概念のうち、日本でもっとも使われているものは「同一性」という概念でしょう。ところが、この同一性の概念も、難解なものの一つにかぞえられ、ああでもない、こうでもないという専門家の論議をきくことがあります。そんな論議はここでは関係のないことで、ただ話を始めるきっかけに借用しようと思います。

<市民だけれど住人>

私は、もし、誰れかからあなたは横浜の市民なのか、住人なのか、と尋ねられたなら、市民だけれど住人だと答えるでしょう。もしエリクソンが、アメリカの市民なのか住人なのか、と尋ねられると、彼はおそらくアメリカの市民だけれどユダヤ人であると答えるでしょう。もちろん、これは仮定です。こう仮定すると、ただ、私が市民けれど住人だといいたい気持ちが理解してもらえますから、エリクソンが上述のように答えるものとしておきたいだけです。

ということは、私はユダヤ人と同等だということです。だが、残念なことがあります。ユダヤ人のエリクソンは、同一性という概念をもっておりますが、私には、その概念がないのです。ユダヤ人は世界のあちこちに離散しています。アメリカに住めば、アメリカの市民権をもつでしょう。だが、彼らは依然としてユダヤ教をもっておりますし、ユダヤ人だということを忘れようとはしていないといえます。ユダヤ教のさまざまな戒律を守ることによって、ユダヤ人であろうとしています。ユダヤ人としての同一性を獲得し、維持しようとしています。エリクソンは、アメリカの市民権をも

っております。だが、彼はユダヤ人なのです。私は横浜に住み、市民税もとどこおりなく払っています。市が設立した学校に勤務しています。住居も市内にとっています。こうした意味では、私は横浜の市民です。だが、横浜市民として獲得しなければならない、また、維持しなければならない同一性があるかと問われると、ノーと答えざるをえないのです。エリクソンは、たまたま、アメリカに住み、市民権をもっています。しかしユダヤ人です。私は、たまたま横浜の設立する学校に就職し、横浜に住むようになったのですが、私はなんだ、と自問せざるをえないのです。私はたまたま、横浜の住人であるということにすぎないのです。たとえ、横浜の設立した学校に就職したからといって、横浜の市民でなく、横須賀の市民でもいいし、東京の都民でもいいのです。横浜の市民でなければならない理由がないのです。ただエリクソンは、どこの市民であっても、ユダヤ人でなければならないのです。彼はボストンの住人ですが、ユダヤ人です。私は、同じ意味で横浜の市民ですが、なに人であろうとしているといえるでしょうか。

<私は日本人>

ある人はいうかもしれません。お前はなんともものわかりの悪い人間か、と。お前は日本人ではないか。日本人なら日本人であろうとし、日本人であることを自覚すべきではないかと。この言葉、この批判は、しごくもったもなことです。しごくもったもだというのは、私が国粹主義者だという意味ではありません。私は、誰からどう見られても、日本人だといわれる以外に、なんともいえないからです。ただし、ここに但し書がつきます。明治以来の多くの日本人と同様に、私は外国から多くのものを学びましたし、誇張していえば、日本人の思考様式より外国人の思考様式を学ぶよう

に勉めてきております。いまもその傾向があります。一般的に教育をうけるということは、アメリカ人、ドイツ人、中国人になろうとすることだといっても過言ではないでしょう。だが、アメリカ人、ドイツ人、中国人になることは決してできないのです。エリクソンはユダヤ人であり、ユダヤ人になろうとし、ユダヤ人になることができます。私は日本人で、外国人になろうとし、外国人になることができないのです。私はユダヤ人に比較されるべきより、ジプシーに比較されるべきでしょう。

もし私が横浜に生れ、横浜に住んでいるとすれば、すこし事情がことなるでしょう。おそらく、私が生れ故郷で就職していたらどうなるか、それを考えてみればよくわかります。だが、私は故郷に住んでいるわけでもありません。いわゆる団地という小鳥の巣のような住家に住んでおります。ユダヤ人たちも、ある時期にユダヤ人の団地に閉じこめられていたことがあります。だが私は閉じこめられたわけではなく、形式的には自分から団地を選択したともいえます。ユダヤ人はユダヤ人と共に住むことを強制されたのですが、私は住居を選択しましたが、誰と隣り近所になるかを選択したわけではありません。誰れが隣りにくるか、は全く偶然です。好きな人がくるかもしれませんが嫌いな人がくるかもしれません。

<団地と故郷>

私には私なりの独断と偏見があります。誰でも同じように好意をもって生活するというわけにはゆきません。アメリカの団地生活での社会的関係を調査したフェスティンガーたちは、同じ道を利用する人々は、接触の頻度が大きくなり、交渉をもつようになるといいます。これはもったもなことだと思いますが、私たちの場合は、少し事情が異なるのではないかとも思います。同じ道を利用せ

ざるをえないし、あまり接触が多すぎるので、できることなら、もう少し独りになりたいものだと思わざるをえないのです。大きな場所に少ない人が住んでいるのと、狭いところに多くの人が肩を接して住んでいるのとがちがいてもいえます。しかし、狭いところに多くの人が住んでいれば、お互に反目しなければならぬという理由にはなりません。お互が知恵を働かすなら、住みよい地域にもすることができましょう。実際に、みんないかにしたら住みよくなるかを考え、その方向に向っているともいえます。

私の見るところでは、この方向が全く伝統に反しているようです。ある人たちは、この団地の地域を一つの故郷にしようと思っています。もし団地が故郷であるなら、おそらく故郷に住んでいるということで、漠然とはしていますが、人の人間としての同一性を維持できるように思います。たとえば、団地の中で故郷でみられるようなお祭りをしたり、盆踊りを催したり、町会の集りをもとうとします。こうした催しがあれば、そこに集る人々もあります。それでも主催者は成功したと感ずることもありましょう。来年も、同じように祭りをやりましょう、とお互いに励みあうでしょう。それで、団地は故郷として感じられたか、というところ、必ずしもイエースといえそうにありません。ひと度、教育を受けた人々は、自分の家にかえったとき、自分は日本人になるよりアメリカ人になりたい、フランス人になりたいと願っているのです。隣りの人が日本人であることに気がいらぬのです。「日本人は……なんでもすぐこうだから」と批判したくなるのです。こうした人たちが集ったところで、お祭りも盆踊りも、故郷をつくることとは結びつきにくいのです。それでも故郷をつくりたいという人は、盆踊りをやるよりほかにはないでしょう。故郷がつくられるためには、お祭りや盆踊りをするのではなく、それから発生し

てくる同一性が地域の人々になければならぬのです。団地のなかには、そんな同一性を感ずる材料は一片もありません。しかし、これは団地の特色というより、都市の特色といってよいものでしょう。古い町でも、すでにお祭りも盆踊りもすたれてきてしまっています。

<「団地を住みにくくする」提案>

しかし、これでは団地を故郷にしたいと願っている人たちに申しわけありませんから、団地を故郷にする試案を提供してみたいと思います。もっと単純で効果的な方法は、団地を地域社会として閉鎖することです。団地の人々が団地以外の人々に対して排他的になることです。もっと具体的にいえば、団地の入口に関所を設けることです。よそ者はむやみに団地にいけないことです。あるいは団地を住みにくくすることです。

こんなふうにいると、お前は正気か、といわれるかもしれません。そう問われれば、私は正気です、と答えます。もし団地の入口に関所をもうけて、団地に用のない通り抜けの自動車の通行を禁止したとします。これで文句をいう人はいません。団地の人は静かになったと喜ぶでしょう。危険なく道路が歩けるようになったと喜ぶでしょう。もう少し禁止を強くするとしましょう。団地の人々の自家用車といえども団地のなかにいけないことにするとしましょう。そうすれば、不便だといって文句をいう人がでてくるでしょう。自動車をもっている人は団地から出て行ってもらえばいいのです。住みにくいと感じた人は、自分から出てゆけばよいのです。これだけの規則を守れる人だけが団地に残ることになり、この規則を破った人は追放するのです。

こうした話は、正気で真面目に考えるべき問題をふくんでいるという独断と偏見を私はもっていますが、おそらく、多くの人は規則という言葉をき

ただで嫌がると思います。規則をつくるのではなく、規則を破ることに価値があると単純に考える人があまりに多いからです。だから、こうした提案は正気の沙汰ではない、と一笑にふされるでしょう。住みにくい横浜市をつくる、といえば市の理事者は精神病院におくられるほかないでしょう。だが、念のためにもう一言だけつけ加えさせてもらいたいと思います。もう数年前のことになるかと思いますが、横浜市の人は横浜市で煙草を買いました、という広告をみたことがあります。それ以来、私は東京に出かけるとき、ポケットの煙草をしらべて、これでは横浜に帰るまで煙草が足りない、と思うときは、まづ煙草を買って電車に乗っています。これはいまでは習慣のようになっています。私がこれまで排斥的な態度をとるようになったのは、横浜で煙草を買えば、それだけに相当する利益が横浜に還元されるときだからです。こうした意味では、私は排他的な横浜の住人です。しかし、こうしたことを、排他的になることを教えてくれたのは、ほかならぬ市当局であったと記憶しています。

これはごく小さいエピソードに過ぎません。大局からいえば、横浜市は、住みよい町づくりをすることを念願しています。団地の人も町の人も住みよい地域をつくらうとしています。私も団地が住みよくなることに反対するわけではありません。しかし、住みよくなれば、それだけの犠牲が必要であることも無視することはできないと思います。

<「勝手な人」と管理社会>

私は小さな地方の都市に生まれました。とって、私が生れた時は、私の家はまだ村でした。市に編入されたのは中学校に行くようになったころでした。そこでは汚物やゴミの処理は、それぞれの家庭で適切な処置がとられていました。多くは近郊

の農家と契約して汚物を処理していました。都会にやって来て、汚物の処理が役所の仕事であることを知ったときには驚きました。都会の人というのは、自分のことを自分で始末できない勝手な人だな、と思ったのです。今にして思えば、これは管理社会の始まりで、田舎者が管理社会の人を勝手な人と批評したものといえるでしょう。

現在、住んでいる団地に引越してくる前のことですが、階段の掃除を誰がするか、という問題がおきてきました。当番制にして住人が掃除をすればよいという人がいるかと思うと管理費をふやして、掃除人を頼んだ方がいいという人もありました。しかし、結局は管理費をふやすことも反対、自分で掃除をすることも反対、ということで階段はいつもよごれていました。今度、新しく引越してきた団地では、この問題は解決されておりました。管理費は、前の団地に比較すれば数十倍に達するものでしたが、自分の家の前の階段も掃除する必要がなくなっておりました。掃除をしてくれる人が定期的に掃除をし、いつもきれいになっています。私は時々空想します。いまにホテルと同じように部屋のなかまで掃除をしてくれるようになるのではないかと。階段が掃除人によって管理され、住人は掃除をする必要がなければ、それだけ階段の住人の間でのいざごはなくなります。それだけ住みよくなります。住人はそれだけ自由になったと考えるでしょう。

事柄は階段の掃除だけではありません。団地の管理事務所は、すべて団地の保全と管理につくしています。自分ではなにもする必要はありません。管理事務所に電話すれば、こと足りるようにできています。ある友人が、これからは団地に住むに限ると私にいったことがあります。唐紙の張りかえをするにも個人だと経師屋を探すのに苦勞するけど、団地にいれば、そんな苦勞はない。いざという場合も、個人の発言はすぐ消されるけれど、

団地の人の発言は、全体の総意として尊重される、
というのです。団地万歳というわけです。まことに
団地は住みよいということになります。

<完全看護と住みよい町>

こうした考えからいえば、住みよい町というのは
完全に管理された社会でなければなりません。子
どもが生まれれば、その子の健康は保健所が管理し
てくれます。親は子の健康を心配する必要なく、
定期的に検診を受けていけばよいのです。幼児の
教育が面倒で自信がなければ保育園にあずけてお
けばよいわけです。こんな話をきいたことがあります。
相談所に子どもをつれて来て、母親のいわく、
この子には手をやいてこまっているので、なん
とか家庭におけるような子にしてほしい、この
子が家庭におけるようになったら引き取りにくる
から、ということであった。これはひどい無責任
な母親もいるものだ、とその話をきいた時に感じ
ましたが、よくよく考えてみると、社会はここま
で来ているのだな、と改めて反省せざるをえませ
んでした。

都会の人は、汚物を自分の責任で処理するので
なく、それを役所の仕事と考えます。昔、私はこれ
に驚きましたが、自の子を教育するのは親の責任
でなく、社会の責任だと考えることは、今日では
常識です。無責任な親と思う方が、依然として自
分の責任を感じている田舎者だともいえるので
す。万事遺漏のないように、社会政策に重点をお
き、自由で住みよい町をつくれ、というのが念願
のようです。もし団地全体が、あるいは、横浜市
全体が完全看護の病院のように管理されたら、住
人たちは大喜びをすることでしょう。横浜市は血
のかよった政治をしている！と賞讃する人もで
くると思います。

端的にいえば、団地の人々は、相互になんの連帯
性もなく、勝手気ままにふるまえることを願って

いるといえます。なんとかして連帯性をもてるよ
うに、努力したりする人もありますが、市民では
なく住人だということでしょう。ところで、最近
はいたるところで公害の問題がおきています。団
地においても例外ではありません。個々人の生活
がなんらかの不利益をうけ、かつそれが共通のも
のであれば、いくら自分勝手な人の集まりでも、
集団をつくります。そして集団的陳情したり、抗
議したり、団体交渉をもったりするでしょう。共
通の集団の目的があれば、協力をおしまないわけ
です。こうした状況においては、団地は文字通り
に団結した地域の様相を帯びてきます。

<団結と井戸端会議>

ここで重要な一つの問題に遭遇します。人々が団
結するというのは、いいことだ、などと簡単に考
えないでほしいのです。卑近な例をとりあげてみ
ましょう。団地に井戸はありませんが、井戸端会
議は、どこでも簡単にひらけます。団結すること
はいいことだけど、井戸端会議はよくないとい
う人によくでくわします。だが、団結がよくない
なら、井戸端会議もいいことのはずです。井戸端
会議をすることがよくない、といわれる理由は、集
って他人の悪口を肴にして喜んでいるという根性
がきたない、ということでしょう。しかし、人と
人が集って、相互に信頼しているかのような錯覚
におちいつたり、相互に強く結ばれていると感ず
るのもっとも有効な方法はなにか、といえば、
第三者の悪口をいうことだろうと思います。悪口
だけでなく、もっと積極的に敵意を示すことで
あれば、二人の結びつきはさらに強いものとなっ
ているように感じられるでしょう。井戸端会議が第
三者の悪口をいうことに落ち着くのも、相互信頼
を確信しようとする人々の切なる要求からおきて
いるものといえるでしょう。団結を強固にするた
めには外敵をつくれ、といわれるのも、もっとも

なことです。『そうだとすると、井戸端会議こそは人の切なる要求から生れた団結への願望のあらわれということになり、井戸端会議はよくない、などといえなくなってしまいます。

公害にむかって団地の人々はたちあがって団結した、という、非常に勇ましく聞こえます。身勝手な人たちも団地のなかに故郷を見つけたように生きかえって来ます。しかし、その根底にある心情は井戸端会議をすこし大きくしたものに過ぎないのです。公害の対象に向って示す非難と抗議は、井戸端会議とおなじようになります。井戸端会議で第三者の隣人の悪口をいうとすれば、なにかとるに足りないほどの細中に尾ヒレがつけられてあることないことがねつ造されます。公害に対する抗議でも、あることないことがねつ造され、抗議のための抗議がおこなわれるようになってきます。これを井戸端会議といわなければ、ほかにいいようのないものです。

<団結のおきて>

私は、ここで公害に向って団体的に抗議している人々にケチをつけようとしているではありません。身勝手な団地の人々が団結したからといって相互信頼が回復されないなどといって喜ぶのは早計だといいたいのです。団結して相互信頼が回復された、というためには、井戸端会議以外の要因が必要だ、といいたいのです。ここで最初のエリクソンの同一性という言葉を思い出してもらえれば幸いです。ユダヤ人がユダヤ人として共同社会を築きあげようとして、同一性をいかに学習しているかを思い出してもらえれば、と思います。あるいは、青年たちは、しばしばヤクザに異常な関心を持ち、憧憬をもつことを思い出してもらっても結構です。あるいは、一昨年からおきた大学の紛争を指導し、共鳴した学生たちが、いかにヤクザ映画を好んで見ていたかを思い出してもらっても

結構です。

青年たちがヤクザに憧憬し、ヤクザ映画に喝采した理由はどこにあったと見るべきでしょうか。その答えは、ヤクザが反体制的であるから、ともいえます。それだけであるなら、もっと関心を示すべきものもほかにあったはずだと思います。私は、青年たちの無意識をゆり動かしたものは、おそらく、その団結と掟の厳しさではなかったのか、と考えております。おそらく、この社会で見られる団結で、ヤクザの団結ほど強固なものはありません。そして、この団結は、井戸端会議のように第三者を非難することによって維持されているものでもありません。団体の掟を守るといふ契いの盃によって維持されています。一度、契いの盃をとりかわしたならば、その契約を破棄することは絶対に許されません。契約を破棄することは死に値します。契いを守ることが絶対なのです。今日結婚の約束をし、明日はそれを破棄するような約束ではありません。軍隊風の服装が青年の間で流行すると、軍国主義の復活だと批判する人々があります。しかし、私は必ずしもそう思いません。ヤクザ映画に拍手する心理と軍人風の服装の流行との間には共通したものが見られると思います。それは団結と掟のシンボルにほかにありません。

人々は身勝手に自由で、なんの束縛もないことにあこがれています。その反面、強固な結びつきを求めております。孤独に耐えられないことをよく知っているからです。だが、井戸端会議の方式で結びつくこと、外敵を設定することによって日本人の同一性を求めることではがい経験をしています。そんな団結の仕方には、こりごりしているのです。それなら、団結を求める方法は、厳しい掟をつくる以外にないのです。青年たちは、厳しい掟をつくり、それを守ることによって団結しようとし、それを守ることができません！ あ

るいは、守るべき掟、戒律、規則、道徳がないのです。いや、しばしば古い道徳が壊され、新しい道徳がまだ発見されてないといわれますが、発見しようとしません。掟を守る自信を失ってしまっているからです。管理社会は、掟をつくらなくても、自分から掟を守らなくても、管理規則によってしばりつけてくれます。

<横浜市民は存在しうるか>

さて、ぼつぼつ結論に移らなければなりません、こう考えてくると、横浜市民というものが存在しうるのだろうか、どうか疑問に思えます。しばしば、いろんな都市で市民意識の調査なるものがおこなわれることがあります。その調査を見ていると、この都市についてどんな感情をいっているか、とか、この都市現状についてどんなことを知っているか、などのことが質問項目として選ばれております。しかし、横浜市に対して、好意をもち、横浜市のことをよく知っていたからといって横浜の市民であるといえるか、といえば甚だ疑問のように思えます。パリが好きでパリに旅行し、名所を歩きまわってごらん下さい。そうすればパリ人が、あなたは私よりパリをよく知っている、というでしょう。だからといって、その人は決してパリの市民だとはいえないのです。いくら横浜のことが好きで、よく知っていたからといって、市民とはいえないのも同じ理屈です。

団地の人々は、時に大がかりな井戸端会議を招集して、あたかも市民であるかの風を装うことがあるかもしれません。しかし、決して市民になろうとはしないでしょう。管理事務所をもって、税金とは別の管用費という税金を払っているからです。それで不自由を感じないからです。その意味では、団地の住民は満足しているといえます。ただし、これは管理者によります。

管理者は、住人に仕え、サービスをこととする公

僕であるし、支配者として君臨するかもしれません。危険な人物です。しかし、自分から掟をつくり、守る自信を失った人々は、この危険な人物をさけることはできないのです。

しかし、私は管理は管理者によってのみおこなわれると思いません。道は左を歩きましょう、というとき道路の管理は始まっています。この道路の通行規則は、横浜駅の地下道では、決して守ることのできない規則です。もし、これを厳格に守るなら歩行することは絶対に不可能です。この意味で古い道徳はすてられました。管理者による通行規則はなくとも、ラッシュの地下道を衝突することなく歩行することができます。人々の通行の流れはコンフォームして円滑に動いています。駅員は声をからして人々の流れの波を統制する必要は少しもありません。不思議なことに、地下道はラッシュでないときの方が、はるかに人々は衝突しそうなのです。コンフォームは人々による管理であろうと思います。地下道の流れを観察していれば、いかなる政治学の論文よりも暗示的です。

<横浜市大教授>